

話し合い

「隔離された世界」としての国語の授業

高木 どうもありがとうございました。相澤さんのおっしゃっていることは、学習指導要領が大きく変わるという可能性も将来的にはあるのかなというふうな期待をしてお聞きしておりました。個人的なことになりますけれども、昨日まで集中授業で他の大学に行っていたのですけれども、その中で、学生が国語の授業というのは「隔離された世界」だと言っておりました。つまり、他の教科などにも生きないし、自分たちが生きていく上でも何も関係ないと。つまり、国語は国語としての「お勉強」だけしていればいい、そういうものだというふうな感じをずっと抱いてきたというようなことを書いてくれまして、私もすごく納得するような部分もありました。それから、勤務校の学部生に必ず授業を始める前に、自分たちが国語教育を受けてきてどう思ったかと聞いています。国語の免許を取ろうとしているかなりの人数の学生が「国語教育って何でこんなに役に立たないことばかりやっているの」とずっと思ってきたというふうなことを言うことが多いのです。役に立つ、立たないという議論はそう単純な問題ではないのですけれども、ただそういう印象を持っている学生たちも多いということです。

今日、先生方からいろいろ御報告いただいたお話は、そういうようなことに関わる「生きたことばの力」をつけていくためにはどうしたらいいかというようなものと、大きくは言うことができるのだらうと思います。その中に例えば、他教科との関わりとか、音声言語の指導をどうするか、というようなことがあったかと思えます。

それで、いろいろこれから先生方にご意見いただきたいのですけれども、国語教育関係者は今発表していただきましたので、日本語教育の関係者の先生方にも、是非踏み込んで御発言いただきたいと思えます。もしよろしければ、例えば、算数とか音声言語とかいうテーマで重なっている部分もあろうかと存じますので、そういう点でもしございましたら。それ以外でももちろん結構なのですが、ご意見いただければと思うのですが、いかがでしょうか。

それでは、ご遠慮していただいていると、時間の方もだんだん減ってきてしまいますので、こちらの方で御指名させていただきます。まず、話題提供ということで日本語教育の方で御発表いただきましたけれども、例えば算数ということで、足立さん。寺井さんの御発表などもございますし、他の御発表などもふくめましていわゆる他教科でのことばの学習ということ、あるいは教室でのコミュニケーションの問題等で何か御発言いただけますでしょうか。

他教科と国語科の問題

足立 実は外国人児童の日本語を指導する中で、新プロにも一度来ていただいた東京理科大の細井先生の数学言語研究会の方に個人的にお願いして参加させていただいているのですが、その中でよく言われていることを、今回のお話をいろいろお聞きしながら改めて

思い出しました。やはり、数学科・算数科の方からも何か行動を起こして、まずことばを理解してその中から数学の認知的思考を高めていかないとだめなのではないかということをよくその会議の中で話されています。ですから、そういう意味では、外国人児童だけの日本語教育、第二言語教育としての日本語教育だけの問題ではなく、日本人も含めてすべての子どもたちの教育の問題だと思います。ただ、私個人の意見を申し上げると、その連携がどうしてもうまくいかないのだろうとつい思ってしまうところが多いのですが、私自身も問題提起というか、そのような感想を持ちました。

高木 どうもありがとうございました。他教科と国語科の問題ということで言いますと、ずっと学習指導要領にも書かれているわけですし、そもそも戦後の国語教育の出発がどちらかという都合的という発想もあったかと思えます。それがなかなか上手くいかないという現状が確かにあるかと思うのですが、そういう点につきまして、あるいは他のことでも結構なのですが、どなたかいかがでしょうか。

明治時代の国語科が担った内容

寺井 発言するわけではないのですが、戦後の単元学習でコアカリキュラムなどの授業が組まれたと思うのですが、社会科などとの合科の中で国語科の指導がどのようになされたのかという、歴史的な資料とか、何か知見とかがあれば、甲斐雄一郎さんにお教えいただきたいのですが、いかがでしょうか。

甲斐ユ 教科の内容というのはやはり時代によって随分違うと思うのですね。国語科という教科の名前は変わらないわけですが、先ほど相澤さんがお使いになったことばで言えば、明治時代の国語科が担うべき内容というものは、内容として明瞭にあり、昭和 20 年代の国語科が内容として担うべきものはあったと。昭和 20 年代の国語科というのはやはり経験主義ということばでいわれるように、ある言語活動を経験することそのこと自体が目標であったと理解しているのですね。ですから、ある話し合いをしたならば、話し合いをすることそのこと自体がもう国語科としての狙いを達成したということになっていたし、ある学年では電話がかけられる、ある学年では挨拶ができる、また別の学年では映画を見て感想を持つとか、そういうふうなことが国語科として期待されていた内容であったので、現在でももちろんそういうようなことは、それを国語科の内容だとできるわけですから、そのような形で実践していくことは可能かもしれませんが、しかし、それだけではもはや誰も納得できないというので、時代に即応した国語科というのが模索されてきたというふうに思うのですね。この場合、何についての言語活動か、というときの「何」に社会的な事柄が設定されたものが、寺井さんのおっしゃったコア・カリキュラムであると理解しています。

国語科の内容の変化

寺井 その中で、例えば国語科である話し方の技術を選択するための指導ということは、20 年代の段階ではさほど気にかけていなかったというようなことでしょうか。そういうことが、他教科の中において国語の指導をどうするかということと比喩的に関連づけて

考えることができるのではないかということでお伺いしたのですけれども。

甲斐ユ これは、私の第 セッションでの話とも関連してくることになりますけれども、話し方ならば話し方、その技術をどういうふうにしたらよいかということが国語科の内容として大きく浮上してきたのは私はやはり、コンポジション理論の受け入れと密接に関連すると思うものですから、昭和 20 年代には具体的にはそのようなことは教科の課題としてはなかったと思うのですね。ですから、社会科や理科などの内容について議論すること、そういうことを経験することというのが、国語科で期待されていたことなのだろうというふうに思うのです。ところが、昭和 30 年代以降、それではことばの力とは言えないのではないかというような議論が勝ってきて、中心点を明瞭にするとか、首尾一貫性をきっちりと保つとか、そういうようなことが国語科の内容として問われるようになってきたのだと理解しています。

高木 ありがとうございます。では、他の先生方、これに関わっても結構ですし、他にも何かございましたらお願いしたいのですが。

教室内コミュニケーション

柳澤 少し、今の話題とは切り変わってしまうのですが、今日の話題の一つに、話コミュニケーションというものがあります。日本語教育の方でも同じく問題となっているので、イギリスとオーストリアの教室内コミュニケーションということについて、もしご存知だったら教えていただきたいのです。日本の場合、例えば、日本語教師も、高校の先生、中学校の先生、小学校の先生も、生徒に対して自分のことを先生と呼ぶことが結構多く見られます。「先生、やるからちょっと待ってて」とかいう。これは、一般社会のコミュニケーション場面で自分のことを「先生」のようにある肩書きで呼ぶ場面というのは、ほぼないと思うのです。ある意味では、教室内がある特殊なコミュニケーション場面になっているのではないかと考えます。この中で話すことの教育とか、コミュニケーションの能力の育成を考える時、特殊環境の中の特殊な部分が出てくるのではないかという気がします。オーストリアとかイングランド、ウェールズの場合、話す教育とか、あるいは聞く、イギリスの場合には聞くが入っていて、オーストリアの場合には聞くが入っていないようですけれども、先生を言語コミュニケーションの単なる一要素と位置づけて、教室内をコミュニケーションが行われる場面と捉えるといったことがあるのでしょうか。

高木 では、上谷さん、お願いいたします。

状況に関係づけて話す

上谷 では、オーストリアの場合、今日お持ちした資料で少し説明できるかと思いますので、私の資料の 4 ページをご覧くださいと思います。ここは、先ほど、「話すこと・読むこと」というオーストリアの特に小学校の低学年に当たる学習指導要領を訳出したものというふうに、説明いたしました。その中の「話すこと」の中の一つであります「状況に関係づけて話すこと」が今、柳澤さんがおっしゃった点に関わるかかと思えます。コミュニケーションをやる場合に、いろいろな日常生活のものとの関連で行なう場合と、

それから、学校という特殊な状況の中で行なう場合というのがあるかと思うのですが、ここに出ているものは、やはり学校内のものと関連づけて書かれていると思います。紹介しますと、「状況に関係づけて話すこと」、状況に応じた発話と言ってもいいのですが、「簡単な話す状況で経験を集める、状況を言語的に克服する」というふうなところがありまして、その中の具体例が3つあります。「あいさつをする、別れを告げる、あやまる」それから「問い合わせる、ないしは情報を提供する」それから3つ目が「提案を言葉にする」。席順のことですとか、休憩の具体化、遊び、自由時間の具体化、そういった学校生活のものを話題として話すというのが挙がっています。

「話し合いの」場面

それから、「話し合い」の場面についてなのですが、そこでも「簡単なコミュニケーション形態」ということで「話の輪」、これはそういう場を作るということなのですが、物語を作るようなグループを作るというふうに、やはり教室の授業の中でとる形態に合わせたコミュニケーションというふうに書かれていまして、この部分だけでは、まだ他のところはよくわからないのですが、やはり状況といった場合に学校内の活動といったものに関連づけて出しているということが言えると思います。

それから、授業の中で、先生が先生ということについては、詳しくは知りませんが、中学校で拝見した授業では、その先生は私と言っていましたので、一般化できるかどうかはわかりませんが、一つの例としては言えるかと思います。以上です。

高木 では、安さん、お願いします。

「役割演技」の重視

安 まず、教師が自分をどう呼ぶかということですが、イギリスの場合、教師が自分自身のことを先生と呼ぶのは、聞いたことがございません。自分自身のことを「先生」とはあまり言わないかと思います。

それと、教室内の活動ということですが、先ほど少し申し上げて中途半端になってしまいましたが、レジュメに「即興劇」「役割演技」「台本のある劇」などが書かれてあります。例えば、「役割演技」というのは、日本でも最近よくサイコセラピーなどの分野で活用されるものです。いじめっ子といじめられっ子に対して、その役割を入れ替えて演技をさせてみるというようなことをやると思うのですが、イギリスの国語科は伝統的に、この「役割演技」が重視されています。

高木 ありがとうございます。では、安西さん、よろしくお願いたします。

日本の言語文化

安西 今の先生の問題ですが、実は私のコメントの内容に入っているのです。自分自身のことを自称の代名詞と同じ形で先生というというのは、日本語独特の一つの表現だと思っています。ただし、これは日本の一つの言語文化なので、例えば、子供に向かって、

お父さんが、あるいはお母さんが怒りますよ、というふうに自称の代名詞として使う。または、相手に対して「課長は昨日はどうしましたか」というように、「あなたは」といわないで「課長は」というふうに身分関係で表現するということは、「先生は」だけの問題ではなくて、日本の言語構造の問題なので、その背後には、身分、階級、相手をどう捉えるか、それに対して自分をどう呼ぶか、という日本の伝統的な社会とか、人間関係とかというものが根底にありますので、それは学校だけの問題ではないだろうと思います。むしろ、言語文化の問題あるいは、社会言語学の問題であろう、外形的な日本語の特色の問題ではないかというふうに思いますけれども、これは、また後で触れたいと思います。

高木 どうもありがとうございました。また、後で触れていただけるということですので、よろしく願います。日本語教育の先生方、いかがでしょうか。では、石井さん、お願いいたします。

評価の方法

石井 柳澤さんの質問に多少関連しますが、コミュニケーションということに関して日本の国語教育と比較して、非常に面白い外国の指導項目であるとか、方法について御紹介いただきました。おそらくそれに対応した形で評価というものがあると思うのですが、その評価の方法ですとか、評価項目、あるいは基準などに対して、何か明確に日本の国語教育と対比的に見られるような事柄がありましたら、教えていただきたいと思ったのですが。

上谷 オーストリアの場合、まだ実はその点についてまでの考察はできていないので、それについてはお答えできません。申し訳ありません。

安 評価ということですが、中等教育レベルでの評価に限定させていただきます。日本の場合、かなりペーパーテストによる一発勝負という側面が強いと思いますが、イギリスでは、大学に入るための資格を取る資格試験というのを1年かけて行います。試験管は誰が行なうかという、中等学校の担任教師が行うわけです。そうすると、結果として評価と指導との区別、言い換えれば、日々の指導と評価との線というのが引けなくなっていくのです。半年ないし1年かけてコースワークというのを教科担任教師が行う。長期にわたるコースワークの中で、教科担当教師が指導しつつ評価も日々行っていく。そして、その結果というものが資格試験の全体ではないものの、相当な部分に活用されるわけです。イギリスでは、評価は「アセスメント」(Assessment)ということになるのですが、そのアセスメントと、日本でいう評価という概念とが必ずしも、ぴったり対応しないのかな、という気がしています。ただし、そこら辺はまだ、勉強不足です。

「教育課程全体を通しての言語政策」

なお、御質問とは別に補足したいことがあります。先ほどの山田敦子さんのコメントの中で「教育課程全体を通して、全職員が意図的・計画的に取り組む」という御提言がございました。こうした言語教育観は、イギリスの国語教育では伝統的・中心的思想として成立しています。イギリスでは、この考え方は「教育課程全体を通しての言語施策 (A Policy for Language Across the Curriculum)」と呼ばれています。詳しくは拙著『聞くことと話

すことの教育学』の第四章と第五章で言及しております。

高木 どうもありがとうございました。ほぼ、時間になったのですが、特に何かございますでしょうか。司会の方が、少し不手際で十分お話しいただけなかったと思うのですが、いろいろなテーマがでてきて、特に、今日は日本語教育との関わりの中で、いろいろ重なる部分をはっきり出てきたように思います。また、そういう中で、国語だけの枠の中では、考えきれないことばの教育の問題があるということも明確になってきたと思います。それから、先ほどの議論の中にも出ましたように、戦後にも合科的な発想の国語教育の時代が一応あったということですが、その時は何となくうやむやになってしまったということがありますが、今回も、うやむやにしないために、やはりもう少し、しっかりとした裏付けをもった実践研究というものを積み重ねていくということが必要かなと個人的には思いました。また、後ほど、少し時間がございますので、その中でもさらにご討議を重ねていただきたいと思います。午後の部の第1部のご協力ありがとうございました。